

# 優勝

## モトコーの夜明け

兵庫 | 明石工業高等専門学校 選手…3年生3名[男子2名、女子1名]



### モトコーの昔話

神戸は中央区、JR元町線から神戸駅までの高架下約1kmにも及んで存在するが元町高架橋商店街(通称モトコー)。戦後、多くの空襲をうけた神戸のまちには壊滅状態であった。そんななか市内を東西に走る国鉄高架橋は焼け残り、その下には多くの罹災者が集まった。敗戦の日の日から饅頭などの食品を売る人も現れる。これがモトコーの商売の始まりである。

その後戦後〜バブル期までは最盛期で、本当に人であふれていたという。とにかく物もすべてあふれだ。神戸港に近いこともあり、外国の船員も多く足を運んでいた。しかし2010年、20年の間にモトコーにかまえる店の数、訪れる人の数は激減した。理由としては震災、店主の高齢化、新しく生まれたショッピングモールなどの存在があげられる。

### モトコーの現在

現在モトコーにかまえる店舗は、洋服、食べ物はもちろん日用品、家電、ミリタリ物、ビンテージ物、アーチスティックなものまで多岐にわたり、マニアックな商品が並ぶ。他にもない、金物の一品を求めて来店のような長い商店街もゆく様はあまたと空探しのようである。しかしながら閉店した商店のシャッターの多さや、うるさいという点で「さびしい雰囲気は否めない」。



# モトコーの夜明け

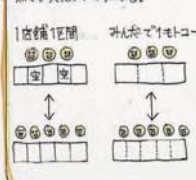
### モトコーの未来話

モトコーをリノベーションするにあたって1番の目標は、モトコーがかつたように人々に「さびしい」活気をとりもどすことである。現在人が訪れない原因として、閉店している店舗のシャッターの存在、うるさい内部、出入口の少なさ、外部から内部の様子がかえりづらいという点が挙げられる。

今回は今ある良さを残し、これらに改善、そこに新しい要素を加えた新スタイルのモトコーを提案する。そして同時に、「1店舗1区画で「みなで1モトコー」という新しい商業方法を提案したい。

#### 1店舗1区画ではなく

みなで1モトコー  
これまでほとんどの区画はスペースを1店舗として使われていた。空の店舗が並ぶとさびしい雰囲気があふれる。そこで、みなで1モトコーを提案する。1区画を1店舗として使うのではなく、空の店舗の存在が、賑やかな印象になる。

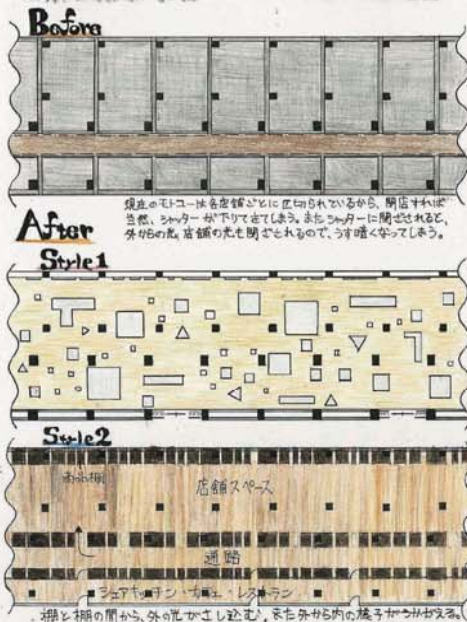


#### Style 1

モトコーには現在、アートギャラリー、古美術館といった芸術的要素を扱う店が多数存在する。こうした店を中心に、その他商品も並ぶような「アートミュージアム」のように商品を見せようというものである。

#### Style 2

現在のモトコーがモノ物に囲まれた洞窟的な長い商店街の如く、一品を求めてゆく空探しのような雰囲気を残したものである。



#### Before



#### After



個人的な思い出と重なる計画でもある。

戦後、荒廃しながらも活気に満ちた街を知っている私のような世代は、こういう計画に弱い。正確に言えば、計画の対象地と時代が懐かしい。現代からは想像しがたいが、モトコーのようなガード下、それに近い地下街の狭く薄汚れた界隈、人の往来や店番の声が飛び交う光景が脳裏に浮かぶ。東京上野の地下街やアメ横周辺は特に馴染み深い。たまたま神戸の親戚を訪ねた、幼い時の三宮のゴミゴミも憶えている。

最近、特に再開発で生まれたビルの店舗街はきれいで清潔だが、どこも同じ印象。東京も神戸も変わらない。同じチェーン店や有名店が並び、便利ではあるが発見的な面白さに欠ける。そういう平準化し

た現代の街にモトコーのような個性と奥深さは貴重であり、これからさらに存在感を増すような気がしてならない。希望を含めて。

この計画は、シャッター街に変貌してしまった懐かしいモトコーに活気を取り戻そうという試みだが、コンセプトとデザイン手法は案外単純である。が、そこがいい。多分往時を知っているわれわれのような世代は、昔を引きずって現在の姿をどこかに残そうとするだろう。割り切りが必要だ。みんなのモトコーで、一つは店舗を共有し、天井から吊り下げた棚で商品を売り、上げて仕舞う。二つは洞窟のような空間で宝探しのようにして買物を誘う。映像プレゼンも音を使いよかつた。地の利を味方につけた勝利。優勝おめでとう。(片山)

### 受賞のことば

このたびは建築甲子園優勝という栄えある賞を受賞させていただきありがとうございます。受賞者を代表致しまして、感謝とお礼を申し上げます。

この作品には仲間の杉山さんや高見さんをはじめ担当教員の水島先生、先輩方、親、クラスメイト、同級生といった、皆さんが想像しているよりも多くの方々の支えや助けがあり、皆のおかげでこの作品ができあがりました。本当に感謝しています。

今回僕たちが提案した作品は、神戸にある元町高架下商店街の良さを活かしたリノベーション案です。高架下商店街の良さや、リノベーションの真意について、皆で深く考えました。また、大会初の動画をを用いた審査に僕たちも追い込まれて苦しみました。そのおかげで技術

的にも人間的にも成長できたと思います。

取り組みの姿勢として、やるからには「優勝するんだ」という気持ちはありましたが、それよりも如何に楽しんで作業できるか、心を豊かにして考えられるか、自分たちらしさをだせるかということを大切にしました。

その姿勢が「モトコーの夜明け」という作品に表れて、評価されたことで自分たちの取り組み方、考え方があったという自信につながりました。

最後に、建築甲子園優勝という事実ともうすでに過去の話であり、だからこそ僕たちは新たな目標に向かって進んでいます。そんな僕たちをこれからも宜しくお願い致します。ありがとうございました。(3年/寺尾心作)